

新美南吉記念館で開催中の安城下宿80周年特別展「日本^{デンマーク}丁抹と南吉の暮らし」(10月27日)より南吉が書こうとした都築弥厚の伝記についてご紹介します。

都築弥厚は和泉村(現安城市)の豪農で、江戸後期に矢作川の水を碧海台地に導く大規模用水の開発を計画した人物です。彼の死により、計画はいったん頓挫しますが、明治には、石井新田(現安城市)の岡本兵松や阿弥陀堂村(現豊田市)の伊豫田与八郎の働きにより明治用水として完成。これが、日本丁抹と呼ばれた安城の農業発展の基礎になりました。

昭和16年10月に『良寛物語 手毬と鉢の子』を出版した南吉は、二作目の伝記に「都築弥厚」を選びました。弥厚は女学校から遠足で何度も訪れた明治川神社の祭神で、さらに女学校で担任した生徒には、伊豫田欣子という用水開削功労者の子孫がいました。遠足では2人腰かけて都築弥厚の

話をしたこともあったそうです。南吉は伝記のために資料を集めたほか、地元の古老から聞き取りを行い、「古安城^{きやすまき}聞書」としてまとめました。

そして伝記の構想を練り、たびたび日記に記しました。昭和17年8月、南吉は長野と群馬へ伝記の執筆旅行に行き、そのことを異聖歌と女学校の教え子に手紙や葉書で知らせました。南吉が弥厚の伝記に取り組んだ証拠は、現在ではこの記録が最後です。

伝記はついに完成しませんでした。地方の偉人である弥厚は資料が少ないこと、また病気の南吉に十分調査を行い、書き上げる体力がなかったことが原因だと思われます。

昭和18年1月、病が重くなった南吉は、療養のため半田に帰りました。2月、女学校の教え子が見舞いに来ると、「明治川神社の伊豫田さんに借りていた資料を戸田先生から返してもらおうようお願いしてくれ」という言付けをします。南吉はこのときまで伝記

の完成を夢見ていたのでしょうか。

南吉の「牛をつないだ椿の木」は、都築弥厚の伝記に関連する作品ではないかと言われています。主人公が「水」をもたらずという人のためになる「仕事」をしようとしたこと。他が見えないほど仕事にとりつかれるけれども、最後には我欲を乗り越えて成長し、他人の心をも動かしていくところに、共通点がみられるからです。この機会に幻の都築弥厚の伝記に思いを馳せながら、「牛をつないだ椿の木」を読んでみてはいかがでしょうか。



▲「弥厚翁」を持つ南吉
*南吉が実際に手に取ったとされる『弥厚翁』を展示中。

みなさんの(声)を聞かせてください アンケート

- Q1 今号でよかった内容や写真があれば教えてください。
- Q2 今号を読んだことがきっかけで行動したこと、または、したいことはありましたか。
- Q3 市報で取り上げてほしい内容や企画、広報に関するご意見・ご感想などありましたらお聞かせください。

回答方法

住所、氏名、年齢、アンケートを書いて、ご送付ください。

あて先

〒475-8666
東洋町2-1 企画課
Eメール
kouhou@city.handa.lg.jp



編集後記



紙は、「弁才船焼きそば」です。半田駅前商店街(蔵しっくたうん)が、半田の魅力を市内外へ発信したいとの想いで、半田のお酢を使用した新しいグルメとして開発しました。

「酢と焼きそばが合うのがなあと思いましたが、試食で口にした瞬間、酢のさわやかな香りと、アサリやこんぶなどの具材の旨みがマッチしてとても美味しかったです。

はんだまちなかフェスティバル(P13参照)で食べられますので、ぜひ一度ご賞味ください。(浅野)

UD FONT
異やすいユニバーサルデザイン
フォントを採用しています。
VEGETABLE OIL INK
植物油インキ使用
印刷 東海通信印刷株式会社

